

---

# みっちゃんの憂鬱【東のエデン】

神狩アイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

みつちよんの憂鬱【東のエデン】

### 【コード】

N8915I

### 【作者名】

神狩アイ

### 【あらすじ】

「東のエデン」二次創作です。

(前書き)

「東のエデン」二次創作です。

なんかすでに咲と滝沢がいい感じの関係になってるっていうこと前提のスピノフ妄想小説なので、あの二人は恋人未満な関係の方がいい!という方は御遠慮下さい(;^\_^)

「みつちよんって、いつもどこのシャンプー使ってるの？」

「え、普通だよ。ドラストとかで売ってるような、一本八百円ぐらいのやつ」

「それちょっと高いやつだよ。やっぱりいいの使ってるんじゃない」

「だって、五百円とかの安ものって髪がキシキシするし、匂いがきつかったりするからやだもん」

「あはは、外国製はやばいってー」

「ガールズトークという、男には到底理解できそうもない、古来より脈々と伝わる女同志のコミュニケーションを、滝沢はこのときばかりはかしましいとは思わなかった。記憶は全くないが、だいたいこういう会話の多くは脈絡が皆無にひとしく、話題が二転三転し、あつち行きこつち落ち、どつちかそつちか道筋を失いつつ旅するようなものだと思っている。

だが、咲とみつちよんがおしゃれに関して延々と情報交換をするトクについてはなぜか、別の話だった。かわいらしい声で騒ぐ美少女というのは、二人だとちょうどいいくらいだ。彼女たちの足元では豆柴が呑気に骨ガムをかじっている。

シネコンのバーで平澤とおネエの二人がカウンターに座り、滝沢は彼らの正面に立って酒を注ぐ役目を買った。大杉は内定先の会社に、春日は大学の講義があるらしい。カウンターに肘をつけて二人の会話を耳をかたむけるかたわら、少し離れたソファで咲とみつちよんがジュースを片手に談笑しているのをながめた。咲がみつちよんのまっすぐな髪を触ったり手ぐしでといたりすると、みつちよんが照れて顔を真っ赤にするのがかわいらしかった。

自分がどういった目的で退廃した豊洲に捨てられたこのショッピングモールをノブレス携帯の金で買収したのかは分からないが、VIPルームのバーには年代物から度数の少ないものなど幅広い酒類、

缶のソフトドリンクまでひととおりそろって、少なくともここで生活しようと模索していたのは分かる。仕入れこそしていないがたいていのものはあるので、エデンのメンバーが集まってやんちゃ騒ぎをするには十分だった。

「東のエデンは起業に失敗こそしたものの、まだ諦めたわけではない。退学事件を機に一斉に手を引いたスポンサーたちを再び集め、やはり画期的であることには変わらないエデンシステムの商品化、一般家庭の普及につとめるべきなんだ」

平澤はそう語って酒をくいつとあおる。ほとんどヤケ酒だ。「ちよつとお、一気に飲んだら体に悪いわよ」と平澤からグラスを奪ったおネエは、それを滝沢にひよいと手渡す。ほとんど女房役だ。平澤には確か八歳年上の彼女がいると聞いたが、おネエの場合は母親に近い。滝沢は苦笑してグラスを受け取り、まだ数センチ分中身が残ったままのそれをカウンター下のシンクに置いた。

「いいんじゃないの。まだ始発段階なんだからさ、もつと思いつて発進して終点に進まなきゃ。もつとも、起業がそこは限らないけど。純粹にシステムの内容だけ考えればすごいけど、細かい問題のことを考えるとみんなあやしんでひっこんじゃうんだよなあ」

「そうだ、俺は世間の声に流されてるわけじゃない」どことなく落ち着きを失いつつある平澤は、カウンターで血気盛んにいばりちらす。「確かにネットの世界は、エデンシステムの問題などアリの踏みつづす程度のものなのだろうし、ネット内の脅威や個人情報流布を考えれば世間がいい顔をしないのも当然だろう。そこは検討に検討を重ねて改良し、ただ悪質なイメージしかない世界を変えなければならぬのも当然だ。それでなきゃ、起業なんか最初から考えないさ」

目を爛々と輝かせて愚痴なのか方針なのか分からない戯言を吐くほろ酔い状態の平澤を見て、滝沢は最初にエデンシステムを介して起こった事件の顛末を聞いたときを思い出した。

あらゆるものにレイヤーを貼りつけるエデンシステム。やがて物に

限らず人がスキャンの対象となり、恋人探しのツールとして発展。だが、とある女子学生の根拠なき誹謗中傷が大量にレイヤーに貼りつけられ、退学に追い込んでしまう。学生の保護者から慰謝料を請求され、起業寸前だったエデンサークルはスポンサーの一斉退去によって活動停止せざるを得なくなつた。

「みつちよんは優秀だよ」平澤が力なくため息をつく。「フリーマーケットからはじまつたあの小さなリサイクルコミュニティを、商品価値のあるものとしてシステム化したのだからな」

「そうよねえ、あたしなんて普通にネット使うぐらいでしかパソコンいじれないもの」おネエが腕を組んでため息をつく。

「ただ小さい頃からパソコンに慣れ親しんだというだけであれだけの才能は発揮すまい。我が従妹ながら関心するよ」

「だろうね。いまいち分かんないけど」

素直にしれつと答える滝沢に、平澤とおネエが一気に脱力する。

資金支援をすると最初に言いだしたのは滝沢だ。まだセレソンのゲームに巻き込まれている概要は話していないが、それに協力するという条件で、平澤の起業の手伝いをしようと思った。「人のために頑張るやつが大好きなんだ」というのは、決して見栄でも演出でもなく、本心そのものだ。

何も特殊技能を持っていないと自覚している平澤が、みつちよんと板津の手を借りてエデンシステムを構築し、商品化を実現させようかという矢先の事件。営業まわりに必死だった平澤の労苦を思えば、会社を立ち上げるなど考えたこともない滝沢にだって分かる。

そして同時に、起業が断念したことによって平澤が抱えることになったであろう、みつちよんへの気持ち。

何が彼を苦しめているのか、追いこんでいるのか、後悔させているのか、滝沢はそれを完全に理解することなんてできない。だが、起業の夢をくじかれたことよりも、きつと、ずっとつらいだろう。恋愛関係や友情を超えた、仲のいい従妹同士の、ひとつの絆。

二人が滝沢の言葉にぐったりしている一瞬の隙をついて、すぐ近く

から子猫が鳴くような騒ぎ声が聞こえた。

「ちよつと、咲、やだつてば！」

「いいじゃん、こんなにきれいな髪なんだから、絶対ヘアアレ工夫したらかわいいって」

滝沢たちがソファの方を振り向くと、咲がみつちよんの前髪をとめているパステルカラーのヘアピンをはずし、持ち運び用の折りたたみブラシを手にして彼女の髪を梳いていた。

「やだよ、結んだときに顔の筋肉がぐーって引っぱられてる感じがやなんだもん。どうせならシユシユとかでゆるくとめてよ」

「全然痛んでなくて表面がすべすべだから、シユシユだとすぐ抜けちゃうんだよ。やっぱりここはゴムとピンでアレンジしたほうがかわいいって」

「それでもあたし、ツインテールとかみつ編みなんて絶対似合わないから！ パソコンで作業するときにはポニテにするぐらいだし」

「へえ、みつちよんってポニテするんだ。見たことないや」

驚きつつもなおブラシで丁寧にみつちよんの髪を梳かす咲に、平澤が苦笑しながら捕捉する。

「昔からみつちよんの髪は長かったからな。小さい頃はずっとポニテールだったぞ」

「えっ、そうなの？」

「一臣、余計なこと言わない！」

ブラシをふりほどくように勢いよく振り向いたみつちよんは、毛を逆立てて威嚇する猫のように平澤に向かって叫んだ。その場にいた全員が笑い、みつちよんは顔を赤らめてぷいっつとそっぽを向いてしまふ。

あらら、子猫ちゃんがご機嫌ななめ。滝沢は肩を落として苦笑すると、いつぞやのようにひらりとカウンターを飛び越え、ダンスのステップを踏むように軽やかにみつちよんと咲のいるソファに歩み寄った。

「確かにみつたんって、髪きれいだからさあ」そう言いながら、彼

女の隣に堂々と座る。「おろしててもかわいいけど、いじつたらもつとかわいいと思うよ」

「ほら、滝沢くんも同じこと言ってるじゃん」

咲が彼を指さしながらくすくす笑う。さらにかつと頬を上気させたみつちよんは滝沢からじりじりと逃げるようにしりぞいた。咲は相変わらず彼女の髪をブラシで梳くので、滝沢にいいようにいじられるよりはこちらのほうがマシだと思ったのかされるがままになっている。人数が増えたことに驚いたらしい豆柴が、背伸びしてみつちよんの膝に乗ろうとする。

「別にあたし、そんなに意識して手入れしてるわけじゃないし」顔をそらしたまま頬を赤らめ、ぽつりとつぶやくみつちよん。

彼女は板津にならぶ凄腕ギークと称され、二十一歳にしてエデンシステムを構築した天才少女だ。携帯電話はいじられないが、パソコンなら彼女の手にかかれば世界中どのネットワークでもハッキング可能なはず。悪く言えばパソコンオタク。決して地味な服装ではないが細かいところまで気が回らないのか、咲ほど今どきの女の子らしさはあまりない。化粧つけもなく、ヘアスタイルはいつも同じ。ファッション雑誌よりもパソコン情報誌のほうを読んでいるのかも知れない。

だからこそそのエデンシステムなのだ。今のみつちよんがいなければ、平澤は夢を夢として終わらせることしかできなかった。

平澤がかわいい娘でも愛でるような優しい目でみつちよんをじつと見ている。同時に、彼はみつちよんへの複雑に入り組んだ畸形の感情を抱えているのだらう。みつちよんが作り上げたエデンシステムが無に帰してしまった事実をトッピングして。

ぷうつとふくれて咲に髪を梳かしてもらっているみつちよんの横顔をしばらく見ていた滝沢だったが、急に新しいいたずらを思いついた子供のように無邪気に笑った。

「やー、やっぱりこうしよう」

油断していたみつちよんの隣にずいっと詰め寄り、彼女の耳の横の

髪をひとふさ手にとった。あつ、とみつちゃんが奇声をあげるときにはもう手遅れだった。予想通り、彼女の茶色く染めた髪はサラサラで、シャンプーのCMに出ている女優のようだった。

滝沢は慣れた手つきで髪を三束に分け、くるくると数秒で編んでしまった。地の髪を毛束に何度も巻き込んでしまったので、結果的に今流行りの編みこみスタイルになってしまう。毛先を咲から手渡されたゴムで手早くとめると、雑誌のモデルのような愛らしいみづ編みが完成した。

咲がそれを見てぱあつと笑顔になり、「かわいい」と高い声をあげた。平澤たちは滝沢の素早い手つきに「おお」と感嘆の声を洩らす。当のみつちゃんに至っては、状況がまだうまく飲み込めていないのか口を半開きにしたまま硬直している。

咲が折られたたみのピンクの鏡を取り出して彼女の前でひらくと、ようやく踏まれた猫のような悲鳴をあげる。

「たつくん、何すんの！」

振りむいた瞬間にみつちゃんのしなやかな髪とみつ編みが揺れて、紅潮した頬にほどよく似合っていた。目尻に涙が浮いている。滝沢は声をあげて笑いながら彼女の頭を撫でた。子供をあやすように。

「ははは、かわいいじゃん、みつたん」

「あたしはこういうのがやだっと思ったの！ ほどくのめんどくさいし、跡がついちやう」

「大丈夫だよ」咲が笑いながらフォローを入れる。「そんだけ芯のおつた丈夫な髪だったら、きつく結んでも跡つかないよ。多分」

「多分って何？ 論理的根拠ゼロじゃん！」

滝沢と咲はついに爆笑してしまった。こういうところが平澤によく似ている。

窮鼠猫を噛むとばかりに腹を抱えて笑う滝沢の横をすり抜けて脱走したみつちゃんは、平澤に半泣きでしがみついた。

「一臣、これほどいてよ。たつくんがいじめるう」

うえーん、と泣き真似をして滝沢を指さすのは演技だろう。

平澤は腕にしがみついて懇願するみつちゃんに一瞬は動揺していたが、すぐに笑って彼女のみつ編みをそつと撫でた。

「いいじゃないか。かわいいよ、みつちゃん」

「うわー臣までいじめる！」がばりと顔をあげた。

「あーら、あたしだってかわいいと思うわよ。今日はそのままでいいんじゃない」

「おネエまで！ 何、今日はあたしをおちよくって楽しもうの日？」

「別におちよくってなんかいない。お前は普段そんなに髪をいじらないから、こんなふうにおしゃれな髪型を作ってもらってよかったじゃないか。かわいいよ、みつちゃん」

兄の威厳なのか、優しく笑ってみつちゃんの頭をぱふぱふと撫でる。その扱われかたに何か一発文句を言おうと金魚のように口をぱくぱくさせていたが、やがてイチゴかりンゴのように頬を真っ赤に染めて、ぷうつと頬を膨らませた。拗ねているのか照れているのか、傍目には分からない。

そんなみつちゃんの頭を、平澤はただ撫でていた。普段は論理で徹底武装し正しさをひたすら追い求めている堅物が、大切な従妹を守る、兄の眼をしている。普段は毒舌でかわいげのないみつちゃんでも、一臣にだけは本心を明かせる。

それは……きつと、双方にとつて救いなんだろうと滝沢は思う。

例えエデンシステムがこのまま時代の流れに巻き込まれて消滅してしまつたとしても。

「これぐらいのみつ編みでいいんだつたら、毎朝やってやるぞ。学校来てから」

その平澤の言葉に、みつちゃんが一瞬目を輝かせて顔をあげたが、すぐにまたふいと顔をそらし、「別にいいよ」とふてくされた。その横顔は、どこことなく緊張したような様子だった。

滝沢が編んだみつ編みを手にして「あら綺麗にできたわねえ」とおネエが彼の手腕を褒める。

「誰か女の子のみつ編みやってあげたことがあるの？ 妹とかいた

んじゃないかしら、家族に」

「いやあ、もう自分が何人家族だったのかすら思い出せないくらいだし、わかんねえや、こればっかしは。なんか適当に編んだらできましたって感じだし」

頬を指で搔いて照れ笑いをする滝沢を、咲が横からひよいとのぞきこんだ。

「上手だったよ。多分、誰か小さい子の髪を毎朝結んであげたりとか、そういうことしてたんじゃないのかな。妹いたんだと思うよ」

「だと面白いんだけどなあ。ちっちゃい女の子じゃなくて、大人の女の子からも知れないし、彼女とかいたのかもなあ」

肩をすくめて苦笑する滝沢だったが、それを見た咲が一瞬表情をくもらせ、しかしすぐに笑顔に変わり「かもしれないね」と言った。ぼんやりと受け答えしていた己を恥じる。

滝沢は数秒、そんな咲の顔を見つめていたが、やがて平澤がみつちよんにそうしたように彼女の頭をぼんぼんと叩いた。少し頬を赤らめて目を見ひらく咲の耳元で「妬いた？」とささやいた。

「ばっ」頭が噴火するほど赤くなって跳ねた咲が何かを叫ぼうとしたが、横から割りこんできたみつちよんによって遮られる。

「咲、これ貸して！」

すばやく咲の手から折りたたみブラシを奪ったみつちよんは、テーブルに置いてあった鏡をひらいて立て、みつ編みの毛先を束ねていたゴムを無理やり引っぱって取ると、乱暴にがしがしとからまった髪をブラシで梳いた。

あ、せっかく俺が編んだのに、と言うよりも早く元のストレートヘアに戻ったみつちよんが、恨めしそうに滝沢をにらみつけ、ブラシを鼻先に突きつけた。反射的に両手を顔の高さまで上げてしまう。

「今度なんかいじくるときは、あたしの許可を取ってよね、たっくん！ 恥ずかしいっいたらありゃしない。あたしはこういうの似合わないんだってば」

「だからかわいいって言うてるじゃん」と滝沢。

「似合ってるのに、もったいないわねえ」とおネエ。

「別に照れなくてもいいのに」と平澤。

「せっかく滝沢くんが作ってくれたのに、もうほどこいちゃうんだ」と咲。

「あーもう！」

見事に全員から猛追を受けたみつちゃんはソファの上で両手をばたばたと振りまわし、地団太を踏んだ。その頬はいまだに紅潮していて、傍目には小学生に見えなくもなかった。

そんな彼女を見て、咲が滝沢に笑い返す。さっきまでの噛みつかんばかりの勢いはどこへ。滝沢はしばらく顎に手をそえてふむと考えたのち、咲の僅かにパーマがかかった明るい茶色の髪を手にした。

「じゃあ今度は咲にしようか。おネエは髪短いし」

「ええっ？」

まさかそんな展開は予想だにしなかったのだろう。ホワイトハウスで最初に自分を見たときと同じようにおっかなびっくり、逃げ腰になる咲の腰をつかんで逃げ道を奪う。揺れる髪からシャンプーの甘い匂いがした。咲の体は細くて、男の自分が少し力を入れたら折れてしまいそうだった。

「やつ、ちよ、ぎやつ」

舌がうまくまわらないのかつぶれたアヒルのような声をあげる咲を見て、みつちゃんははじめ一同が笑う。「やーい仕返しだー」と口の端を指で広げてあっかんべーをするみつちゃんがかわいくて、彼女に気をとられている隙に滝沢に引きずられた。

「そういうわけだから、ちよっと化粧品売り場のところに行くってくるわ」

咲の腰と肩をつかんだまま滝沢は彼女をVIPルームから連れ出した。豆柴が元気よく吠えて見送る。

「頑張つてねーん」おネエは完全に他人事である。

ビッグスクーターの脇をすりぬけ、咲の手を引っぱって走る滝沢。

彼はシネコンの下の階までエスカレーターを駆けおり、エデンメン

バーの声が聞こえなくなつたところでようやく咲を解放した。

「滝沢くん」全力疾走したので咲はぜえぜえと呼吸を整えている。

「あたしはいいよ、髪いじっても印象変わらないくらい淡泊な顔だし」

そこまで言うつと滝沢は彼女の両頬を手で包み、優しく唇同士をのせた。一瞬の出来事だったので咲は目を大きくひらき、何がなんだかと困惑している間にキスは終わってしまった。

何が起こつたのやら。

ぽかんと口をあけたままの咲を見て、滝沢が吹き出す。かわいいとか、愛しいとか、面白いとか、色んな感情がぐっちゃになつて。

急に笑いはじめた自分を見てムキになり「なんで笑うの」と照れ隠しのように呟く咲を見て、余計に笑いが止まらなくなった。

滝沢は彼女の頭をぐしゃぐしゃと撫でて「おーよしよし」とふざける。

「たまには、変なところで妬く咲もかわいいなーなんて、思ったただだよ」

まぎれもない本心だったが、直後に咲から右ストレートが飛んできたので、今だ笑いつつも顔をそむけて避けた。どうせこのあと、咲の髪をいよいよにいじつてまた照れるのだから、滝沢にとつてはこんな愛らしい咲の仕草ですら前哨戦のようなものだった。

(後書き)

オサレに目覚めたパソオタみっちよんと、滝沢のさりげない一言に  
ぶーたれて嫉妬する咲萌えな話を書きたかっただけw  
ようするに女の子にひたすら萌えましようの回。  
あーみっちよんかわいい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8915i/>

---

みっちゃんの憂鬱【東のエデン】

2010年11月29日01時31分発行